

新しい感性に会う。もう私はそんなふうには書けないと思う。それは衰えていく自分に立ち会うことかもしれないけれども、はじまりのひかりに似ている。

雨に冷えゆく拡声器

長谷川柊香 宮城県

こんなふうに、しずけさを描くのは難しい。書き手はそのとき、しずけさのほitoriまで行く必要があるから。ただそこは、ことば以前のなつかしい場所である。

おなじ作者の作品に『踊り場で息継ぎをする／遠くに夏の海』があるが、こちらも同様の印象を受ける。蝉しぐれのなかに置き去りにされたような世界のなかで、ことばが生まれるまえのしずかな場所へとつれ去られる。

雨の日は耳をすませる

公園の遊具から血の香りがしてる

まちりこ 埼玉県

遊具からただよう血の香りが生々しい。作品に書かれる『耳をすませる』という行為自体が、罪深いことのような気がしてくる。聞いてはいけないものを聞こうとしているかのような錯覚に陥る。

うそみたいだね、

って きみが語りだす

性のはなしは時雨のにおい

さいう 愛知県

『性のはなしは時雨のにおい』という一節は、言い得て妙だと思う。時雨は、偶然に起こった事故のようにもみえる。必然性を持たない性のはなしが、切なさとともに、読者の共感

を誘う。

全部間違い全部間違ってきたおれ  
の靴に白亜紀の砂がつく夢

白野 新潟県

『全部間違い全部間違ってきたおれ』というフレーズに惹かれるのは、間違いに対する主人公の悔しさに共感するからだろう。靴についた白亜紀の砂は、唯一残った希望のようにもみえる。

愛情を求めるあいだじゅう 8℃

松下 誠一 東京都

「あいじょう」「あいだじゅう」といった音の重なりや、℃という言い回しが面白い。写真を組み合わせたなら、化粧品のポスターのコピーにもできそうなフレーズ。少しレトロな感じがいい味わいを出している。

街とは  
しろい凹凸と、風だけです

氷丸 茨城県

街をこんなふうに、暴力的にまとめてしまってもいいんだろうかと思う。けれどもそれは、主人公の街にたいする無力感と表裏一体のものかもしれない。失うことに気づく前にすでにそれは失われてしまっているようにもみえる。

地平線めく校庭の夏休み

奎いう子 佐賀県

地平線のような校庭の夏休み。こんなにきれいな夏休みははじめてかもしれない。

蛇口には星の通った跡紫陽花

吉沢 美香 宮城県

『蛇口には星の通った跡』という一節のイメージが鮮烈で、きらきらとした映像が立ち上がる。韻をふんだ紫陽花という季語も美しい。

ほどけてゆくわたしの表層  
秒針だけがなめらかに動く

こはくいろ 大阪府

ほどけてゆくのは表層だけではないだろう。世界があまりに不完全な気がしたのは、珈琲の苦みの良さをわからなかった頃のことだろうか。

同じ作者の作品に『手のひらは所詮、／あおぞらだってこと／後れ毛がいたむ』『そらがまわっていたとしても／／だれも風にならないで』といったものがある。

つやつやと胎児の模型 風薫る

篠遠 早紀 東京都

一マス開けの口語俳句は松本恭子のそれが有名で、漢字が繋がったばあい一マス開けた方が読みやすいことがある。表現される内容と表現の方法が違和感なくつながっていて心地よい。これから生まれてくる赤んぼうの玩具だろうか。やわらかな風と、未来への希望。作品からはいろいろなものが垣間見える。『話し込む非常階段 夏休み』という作品も同じ作者のものである。

これはもう降っていないといち  
ばんに君は気づいて少し急いだ

志内 悠真 京都府

君への言葉は何一つ書かれないし、登場人物の感情もそこにはない。ただ雨上がりの君を追いかけるまなざしだけが、読者のまえに置かれる。

六月の映画が始まりそうな音

有野 水都 東京都

六月の映画というのはどんな映画だろう。とほうもない物語が始まりそうな気がするの  
は、はじまりの音にそれが集約されているからだろう。

カブトムシの匂い

積乱雲は

涼木 和貴 北海道

空いっぱい広がる雲。書き手はとおくまでとどくアンテナを持っているようだ。それは  
野原もこえてカブトムシの匂いも持ってくる。『傘の奏者は六月の雨』も同じ作者の作品。

唱和する水兵リーベ

僕たちは

海の上ではちっぽけだった

うたた 岡山県

青春の特権というのは大人たちの幻想でしかなくて、ただ特権があるとすれば、世界に対  
する自身のどうしようもない無力さの自覚と、無力なはずの自分に対する無知とを同時に  
持つことができることかもしれない。